

# お茶うけ 第62話

## 言葉とメロディ

私は、嬉しいときも、寂しいときも、いつの間にか歌を口ずさんでいます。童謡、キャンプソング、賛美歌、昔の軍歌、NHKのみんなの歌、ロシア民謡、歌謡曲、さまざまなジャンルの歌が時と場合に合わせて顔を出します。そして、いつしか慰められ、元気づけられている自分に気づきます。

息子が九州に転勤した関係で、今年(1999年)の2月初旬、引っ越しをする10日ばかりの間、私ども夫婦が孫を預かりました。孫は丁度1歳の誕生日を迎える前で、一人で歩き始めるところでした。何十年振りかに赤ちゃんの世話をする妻と、子育ての経験の少ない私の二人の共同作業で、途中で突発生発疹で発熱するというハプニングもありましたが、なんとか無事に孫を鹿児島島の息子夫婦に引き渡すことができました。

孫は、我が家に着いた日から、日を追うごとに歩きがしっかりしてきました。私は息子の世話をしなかったことの罪滅ぼしに、この機会に赤ん坊と終日付き合うことにしました。不思議なことに孫をあやしていると、昔覚えた子供の歌が幾つか自然に口から出てきました。孫との会話はまだむりなので、孫の一日の行動の一つ一つに、それぞれ一つの歌を意識的に対応付けて、こちらの意思を伝えてみようと思いました。

手を挙げて、がらがらを振って遊ぶ時は「キラキラ星」を、歩く練習は「おもちゃのマーチ」で、孫が手押しの子供用自動車を押して歩けば「Row row row your boat.」、そして抱いて寝かせる時は「お馬の親子」を歌いました。

孫にどこまで伝わったかは分かりませんが、2~3日して「キラキラ星」を歌うと、体を前後に揺すってリズムをとるようになり、また、「お馬の親子」のテンポを少し落として歌うと直ぐに寝るようになりました。

何十年も歌わず、もう忘れていた筈の歌が、次々と思い出されました。ある歌は先ず言葉から、他の歌はメロディから出てきて、ふんふんとハミングするうちに一曲全部がまとまりました。これは、私の中に言葉とメロディが一体となって記憶されていた歌が、その歌に相応しい情景に誘われて顔を出してきたのでしょうか。

ところで、私は歌謡曲をあまり知らず、カラオケも苦手ですが、心に残っている歌謡曲も幾つかあり、時に応じて私を慰めてくれます。しかし、それらの曲はすべて10年以上も前のもので、新しい曲は一向に増えません。それは、私に深い共感を起こさせるような言葉を持った歌が少ないことにも原因があるようです。作詞家の阿久悠の言葉を借りれば、「現在はミュージック(音)はあるが、ソング(言葉)が無くなった」時代なのです。

阿久悠によれば、歌謡曲は次のようにして言葉を失っていきました。

「貧しく何も無い時代には、言葉がすべてでありました。人びとは、語らうことで夢や理想を手に入れ、また言葉によって不幸や不運に立ち向かいました。その時代、歌謡曲は言葉を紡いで、見知らぬ人との共感の輪を広げるために存在しました。言葉にメロディをつけて歌う歌謡曲によって、多くの人の心のうちに眠るものと、ふれ合うことができました。

豊かな時代になって、言葉を用いなくても欲求を満たせるようになると、言葉は語らうものでも、心をかき立てるものでもなくなり、言葉によって美しさや哀しさを迎えることも、また、一人一人の心の襷(ひだ)を尋ねることもなくなりました。言葉は、いつしか痩せ衰えました」

(プロムナード 歌謡曲の逆襲(1) 日本経済新聞(夕刊)1998年12月11日より抜粋)

昨年来、阿久悠は、言葉の復権を目指して作詩に意欲的に取り組み、歌謡曲を復活させようと活動しています。

私は、心をなごます歌謡曲ができて、多くの人に愛され、見知らぬ人ともやさしい言葉をかけあうような世の中になってほしいと思います。私も、ささやかながら言葉の復権のために、孫の成長に合わせて、多くの歌を教え、歌に関連するエピソードを話し伝えたいと思っています。

以上

